

‘18(平成30)年9月28日



# 10月 釜小だよ

横浜市立釜利谷小学校

釜小Web <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/kamariya/>

## 秋を感じる



学校長 岡野 真由美

歩きつづける 彼岸花 咲きつづける (種田 山頭火)

先日、学区を歩いていたとき、道端に彼岸花が咲いているのを見て「こんなところに。」と意外に思うとともに、幼いころ見た風景を思い出しました。9月半ばを過ぎて風が心地よく感じられるようになる頃になると、田の畦道に真っ赤な花が並んで咲いているのに気づいて「いつの間に育っていたのだろう。」と不思議に思ったものでした。毎年忘れることなく花を咲かせるので、それを見て本格的な秋の訪れをしみじみと感じるようになっていました。

彼岸花は学名リコリス。ヒガンバナ科ヒガンバナ属の多年草で、真紅のほかに白や黄色もあり、すっと伸びた茎にランに似た小さな花が外側に向かってふわりと開くところがなかなか豪華です。花が咲いているときは茎だけが地面から出ていますが、咲き終わると線形の細い葉が出てきます。冬には地面から全く姿を消し、次の秋まで何も生えてこないことが不思議です。根には強い毒があり、主に動物や虫除けを目的として昔から田の周りや墓地などに球根を植えていたということで、その名前と毒性から日本ではあまり好まれない花だといわれています。しかし、サンスクリット語では「曼珠沙華(マンジュシャゲ)」＝「天界の花」という意味をもち、幸せが訪れるとき天から舞ってくる縁起がよい花とされている説もあります。

4年生の国語の「ごんぎつね」(新美 南吉 作)では、主人公「兵十」の母親の葬列を、六地藏の陰から「ごん」が見つめる場面に彼岸花が次のように登場します。「墓地には、ひがん花が、赤いきれのようにさき続いていました。(中略) そうれつは墓地へ入ってきました。人々が通ったあとには、ひがん花がふみ折られていました。」この情景からは、秋が深まる頃の季節感や、人々に踏み折られた赤い彼岸花から何とも言えない悲しみが想像できるのです。このときの兵十は白い袴かみしもを着けており、赤い花との対比もまた、美しく目に浮かびます。

冒頭の俳句は、明治から昭和にかけて活躍した俳人 種田 山頭火たねだ さんとうかの作品です。五・七・五の定型に縛られない「自由律俳句」の作者として名が知られています。無心なのか、何かを考えながらか、作者が長く続く道を黙々と歩き続けるその傍らに、真紅の彼岸花が連なって咲き風に揺れている、そんな秋の日を思わせる作品です。

10月。子どもたちは運動会の準備に余念がありません。流れるように時を過ごす中でも、五感を働かせて深まりゆく秋を楽しむことができたらすてきだと思います。